

三月、東京——。

この日はうらうらと暖かな日差しが東京全体を覆っていた。

春という言葉がびつたりな陽気。

そして、満開の桜。

ここ、ヴァルハラ政経塾も桜の花びらが舞い、あたたかな日差しが降り注いでいた。

「東京は暖かくて羨ましいのう」

ほんのり湯気の立つ紅茶のカップをゆっくりと置くと、このヴァルハラ政経塾の理事長を務める少女、ルイーゼ・アンナ・フォン・ホラントが小さなため息をついた。窓から降り注ぐ日光を浴び、実に幸せそうだ。少女、とは言ってもその表情は大人びており、紅茶をたしなむその所作にはまるで子供っぽさはない。

「あちらはまだ寒いですか」

後ろに控えていた長身の男が、苦笑する。

「まだ雪に覆われておる」

少女ははにかんだような苦笑を浮かべると振り返って、うなずいた。

「空港へお迎えに上がりましたときには、真冬^{まふゆ}装備で驚きました」

「それくらい寒いのが。そういえばお主は妾を迎えるのは初めてじゃったな。今度、我が屋敷に招待してやろう。ふふふ、驚くこと間違いなしじゃ」

「機会があれば、是非お伺いしたく存じます」

男はうやうやしく頭を下げた。

「しかし今日は天気がよくて妾は嬉しいぞ。まったく新しい門出にふさわしい陽気じゃ」

「神の祝福を感じます」

「そうじゃな」

ルイーゼは満足げに笑った。

ヴァルハラ政経塾は政界・財界に多くの人材を輩出している学び舎で、政経塾とはついているものの、その様式は高校・大学である。

この塾へは塾側からのスカウトでのみ入塾可能であり、生徒の方から受験して入ることは叶わない。選りすぐりの生徒だけが通うことのできる私塾なのである。

その理事長であるルイーゼは、このヴァルハラ政経塾が創設された明治時代から理事長を務め、その齡は一〇〇年を優に超えるという。

「理事長、そろそろ時間です」

そばにいた男がツカツカと出口に歩いて、理事長室の扉を開いた。

「うむ」

ルイーゼは上機嫌で席を立つと、窓から降り注ぐ陽光を少し名残惜しそうにしながら、理事長室を出た。

扉の外では少女の背丈もあろうかという大きな狼が二頭、少女を出迎えた。二頭とも精悍な顔つきをしており、その眼差しは鋭く、まるで人の心を見通しているようにも見えた。

「おっと……」

少女を廊下へと誘導しようとした男が一瞬たじろぐ。「大丈夫じゃ、どちらとも人間ほどには賢い。気紛れで嗜んだりはせぬ」

ルイーゼが笑いながらそう言うと、二頭は少女を守るように、その両脇についた。

二人と二頭は本部棟の長い廊下を通り、暖かな日差しが降り注ぐ回廊を歩いた。回廊に囲まれた中庭にはアカシアや董菜すみれなど様々な花が咲き乱れ、春をこれでもかと謳歌している。遠くには桃、中央の噴水近くにはチューリップも見える。

この回廊を渡りきると、卒業式が行われる講堂へと抜けるのだ。

講堂にはフォールクヴァングなどという大仰な名前が付いているが、生徒の誰もその名で呼ぶことはない。原因は「講堂」と呼ぶ方が楽だからである。とはいえ明治期から残る荘厳なルネサンス形式の建物で、都の文化財に指定されているほどの立派な建物だ。

講堂に近づくと、中からもったいぶった音楽の演奏が聞こえ、講堂の大きな扉が開かれると、その音が一気に解放されてルイーゼたちを出迎えた。曲は、そう、ワグナーのニルンベルグのマイスタージンガー。

同時に講堂内にいた生徒たちが立ち上がり、ルイーゼに拍手を送る。

卒業式典、とは言ってもヴァルハラ政経塾の生徒数は全学年合わせても一二〇人程度。式の音楽を演奏しているのは、生徒ではなく雇いの楽団である。

ルイーゼは拍手に囲まれながらももったいぶった歩きで、理事長席につくと満足そうに生徒たちを眺めた。

演奏が終わると、いよいよ卒業式の始まりである。

塾長のあいさつ、卒業生たちの言葉、そして卒業証書の手渡しと式は順調に進んでいく。その間も理事長ルイーゼの出番はない。ただ奥まった一番大きくて立派な椅子に腰掛け、式を見守っているだけである。

卒業証書の授与が終わると、再びけたたましく威勢

のよい音楽が演奏されはじめた。その間に教卓が片され、真紅の絨毯が敷かれ、奥に掲げられていた校章が取り外されると、十字架をモチーフとした紋章とこのヴァルハラ政経塾を創立した橘家の家紋が掲げられた。

そこで曲がいったん終わり、矢継ぎ早にファンファーレが鳴り響く。

すると卒業生の中から一人の生徒が歩み出て、赤い絨毯に沿って壇上へと上がり、うやうやしく跪いた。

ここで初めてルイーゼの出番となる。

「これより、賢者の義を執り行います」

司会その言葉と共にルイーゼが椅子から立ち上がった。とはいえ、その小さな身長では荘厳さは感じられないが、しかし講堂内は静まりかえっていた。

ルイーゼは跪く一人の卒業生の前に、同じくもったいぶった動作で立つと、もう一人、このヴァルハラ政経塾の塾長がルイーゼの傍らに立った。その腕には一振りの剣が抱えられていた。典型的な西洋剣で片手で

扱うタイプのものだ。

ルイーゼはその剣の柄を掴み、鞘から引き抜くと、きらめく剣身を卒業生の右肩に当てた。そして騎士の叙任式よろしく大仰な文言をルイーゼは曰う。

「汝、我が教会と我が民、そして神に奉仕し、異教徒の暴虐と戦う全ての者の守護者となれ」

「父と御子と聖霊の名において、汝、賢者としてその資格と、権限と、義務を授ける」

ルイーゼが宣言を終えると、会場は再び静寂に包まれた。

一人一人の息遣いが聞こえてくるかのような静けさ。この静けさが何よりも神聖さを演出した。まるでルイーゼの持つ剣の剣身が光り輝く様子さえも音になって聞こえそうだった。

ルイーゼはその静寂の中で、相変わらずの大仰な動作で紫地の大きな布で剣身を覆い、その剣身の方を持って柄を卒業生へと差し出した。紫の布は厚手の生

地で、そこにも十字架とそして橘家の家紋が、金であしらえてあった。

卒業生は跪いたまま剣を受け取ると、天を見上げ、ちやうど柄の辺りを胸に当てた。

恒例では剣を受け取った者は、ルイーゼより賜った祈りに対して宣誓をすることになっている。立ち上がり、剣を天に掲げ誓うのだ。そこで彼は「賢者」という存在となり、そしてこの義に出席した者は彼が賢者となった証人となるのである。

その剣先を天に向かって掲げるところまでは、確かに予定通りだった。しかし次の瞬間、卒業生が何かを叫んだ。その言葉が日本語ではないというのは誰しもが解ったが、その意味が解った者は……おそらくルイーゼだけだったかもしれない。

卒業生の叫びと同時に真っ黒な閃光が一瞬講堂内を駆け巡る。このブラインドネスの光によって、講堂内にいた大半の人間が失明した。

「バカな!？」

第一声をあげたのは、ルイーゼだった。

その言葉を言い終わらないうちに、すでに剣の切っ先はルイーゼの元へ届いていた。

左胸、いや心臓をわずかに逸れ、左腕の根本近くを剣が貫き通していたのだ。肩甲骨がまるで紙のように破れてつき通され、ルイーゼの身体を貫通している。

だが、ルイーゼの身体から吹き出すその血は、黒く濁っていた。

ルイーゼの後ろに控えていた二頭の狼が卒業生に向かって飛びかかろうとしていたが、何故かルイーゼは右手で二頭の動きを抑制した。

「貴様……」

そして自分に剣を突き立てた相手を睨みあげる。

しかし相手はかまいもせず剣を引き抜き、次の一撃を振り下ろそうとした。

「残念じゃ……」

だがそれよりもルイーゼの方が速かった。右腕を掲げたかと思うと、その手の軌跡に二〇もの光が出現し、それらが一気に彼に向かって行った。

左腕が吹き飛び、足、腹が粉碎され、最後、その頭もが吹き飛ばされようとした瞬間、彼の姿が剣もろとも消え去った。

「な……!？」

行き場を失った光弾はそのまま講堂の壁を撃ち抜く。

ここで初めて、ルイーゼは敵が卒業生の彼ではないことに気付いた。そう、今までに味わったことのないこの痛みも。これはただの剣による傷ではない。忌まわしき不浄の力。

薄れ行く意識のなかで、ルイーゼは自分に付き添っていた男の姿がないことに気付いた。

「くっ……」

最後の力を振り絞って、ルイーゼは何かの呪文を唱えようとしたが、貫かれた傷故に左腕を動かすことが

できなかつた。神経までぶつぷりと切られてしまつていたようだった。結局、呪文を完成させることができず、ルイーゼの意識もまた途切れた。

倒れるルイーゼを狼たちが支えようと駆け寄つたが、ルイーゼの肩口からあふれる血の飛沫に触れて、慌あわてて立ち止まつた。

ルイーゼがそのまま床に倒れる。

失明を免れた数人がルイーゼに駆け寄ろうとする。

それを狼が体当たりして阻止しようとしたが、一番ルイーゼの近くにいた塾長がルイーゼを抱きかかえてしまった。

「はっ……ぐっ……!!」

ルイーゼの血を浴びたその場所が一瞬で腐り、骨が露出したかと思うと、その骨もぼろぼろと崩れていく。

ほぼ瞬時にして彼の半身が腐り落ち、その場で内臓を垂れ流しながら絶命した。

周囲は光を失つた者達のうめき声、わめき声。

外へ飛び出す者、嘔吐する者、気を失う者など多数。

気が触れてしまった者も少なくない。

うらかな春の陽気にふさわしくない、嵐のような出来事であつた。

東京 守護 神

